C1 叙論に代えて

S1 会釈

ごきげんよう。気違いじみた色々の感覚が流れ込んできたのにも関わらず、それをどのように呼ぶべきか私は終ぞ知らず、それゆえ私の語彙が増えることがなかった。だから本書でもなお、昔日の口蓋をさらすだろう。そして、まどろみの内にあっては、何事も表現しえないし、何かを読むということすら困難になってくる。それを認識して、私は寝床をより平坦かつ不動の、あるいはもっとも地に即した“布団”なるものに代理させた。これにより、私の魂の器質への良い効用を得た。それにしても、私はなぜこの石板の世界に戻ってきたのか、私を除いて誰の役にも立たないであろうこの問いは、私にとってはそれなりの口実を要求するものなのだ。そもそも、私と関係するあらゆるところの人々は、相も変わらず巨視的界についての、あるいは既にある何物かについての果てることのない退屈な議論に巻き込まれており、私は耳を塞ぎたくなるほどこのフレーズを聞いた、「とはなにか？」。この矢は、決まってある光を投じる。私たちを醒めさせた、かの神聖な、老人の深い孤独じみた領海におけるキャラベル船の座礁である。砕けた氷山の欠片はそれぞれ相異なる色彩を発し、すべては眩惑するほど輝いていた、あの月の宵。まあしかし、この光景が美しいのを除いては、我々をまさに迷わせるアイテムである。この矢は、弓道の作法を顧みぬまま飛んでゆくからだ。なぜならば、それは自明かもしれない。

奇異な文体というものに魅惑されているのは、あまりに幼稚な憧憬であると想われるが、実際我々は何かを隠すことで、その隠れたものを
明るみに出そうとする。狂気沙汰においては、必ずと言ってよいほど暗号の紙が落ちている。しかしこの比喩はむしろ、社会への反抗的革命の思想的根拠や、石板に刻み付けようという意志の現れというよりも、遊戯や、自身の快や優越のための場合が少なくない。まどろみの内にあっては、そのすべての暗号が鬱に感じられる。怒りすら湧く。そうだ、我々は適当な沙汰に便乗して、ごたごたした混乱に乗じて、大声のどさくさに紛れて、真に意図を吐くことを自分に許すのだ。実際、これは隠蔽されるべきものだったが、これを吐くならば、いいだろう、私の奇異と想われる文体はすべて、そうしたシャイな側面の作用であろうということをここに宣言してもよいだろう。本書における課題は、ここにもある。本書の題が「状態性のまどろみ」であるということ、これは隠喩的に前記の事柄を示唆する。「状態性のまどろみ」は、状態性が所有するまどろみ、ないしは状態的な何かがまどろんでいることを示すものでもない。この「の」は接続詞「と」にもっとも近いものである。といっても、これを「と」に変更するわけにもゆかない。「の」が持っているのは、“状態性がまどろみを含む”というフレーズであり、これは「と」にはないから。

ところで私は同じことを繰り返し書くつもりは毛頭ない。

心を許すことは、間柄の緊密性ではないと信じている。これは巨視的界の話なので、いずれ私のもっと本当の理論によって、“優柔不断の法則”などと同様の系列の中に見出されなければならないだろう。数学は沢山の人間をその官能的な唇で魅惑してきたが、彼女（数学）について対話不可能な時、官能美の崇高性を俗物化し、人々の嘲笑を誘う脂質として提示せざるを得ない、これは彼女への欺瞞であり、また自分自身の咎めるべきパターンである。そんなとき、底意の情熱を語り合える他者的存在が抽象的に必要ではないか。そして、それが「心を許す」と呼ぶのではなかったか。ところで私が想うところでは、今存在する数学的体系は洗練され精製されたものであるゆえに、その不完全な時代についての知識があまりに知られていない、そしてその知識は私の欲するものである。現在の体系がもっとも確実だと言っているのではない。心的過程の特質上、放棄するということに最も近い感覚を呼び込むことは造作のないことになってしまっている。だから、想像することもできない。想像能力の責任にするのは、極めて他者投げ的であると言わざるを得ない、悪徳を手前勝手に押し付けている。実際、数学的体系を開闢する他、

道はない。それはいいとして、まあそういうことだろう。そんなわけで、私は“変遷公理論“の造物主となった。あるいはそこから生まれた二次分野”変遷形状公理論“の信じる神でもある。どちらかというと、この二次分野の方面をこそ前に進めているのだが、そこについては沈黙しておこう。いわばこれは私の、嗜癖というほど過剰なものでもないが、そのような遊戯である。言っておくが、これらの理論は矛盾あるいは不徹底の連射であり、私はそれらの攻撃を率直に吞み込んでいる（無視している）。前著において、理論の自由発展性のカギは”演算“にあるということを述べたにも関わらず、ここでは最も単純な、分解との関係においての合成しか記号化されていない。厳密な問題に不可分な”制約 “を如何にすればよいか、なる問題について、様々に行きずまってのちにたちまち気がつくことを手掛かりにしている。全ては斜交いに交叉し、一定の知的方向づけを消去する。むしろ、この混乱と無秩序の空間に長く浸っているうちに、ゆきずりの人間さえ診れば発見できるような黒く変色した腫瘍すらも、私の視認できる範疇から背中を逸らせている、そんな気もしなくない。だから、纏まって体系づけられるまではこれを本書においても、いずれの時刻においても語りえることはない。

まどろみの内にあって、私を隠蔽された真意に導く、あるいは直接的に示すような＜ルビ＞を要求する。これは専ら“マニケーのルビ”である。これを私は＜慧眼ルビ＞と呼ぶ。これは記号によって表されるのが理想なのではあるまいか？形式論理学や数論などにおいての記号論理性は、ひとえに無意識的条理の疑似的顕揚を意味するに過ぎないのではないか。もしそうならば、誤謬は一体どのようにして起こるのだろうか。もしそうならば、精神構造論の記号論理体系化への漸進を運ぶべきではないか。ディスレクシアは慧眼ルビによって緩和できるかもしれないだろうが、あるいはそのような症例の分類や統計的解釈に終始している現代の厳密科学的精神医学や実験心理学は、私の欲するものではなかった。

本書は、前著で論じた精神構造論の史的記述と、訥弁論の改善、あるいはそれと並走して働く精神構造論の仮想的発展を記述するものである。直近の私の訥弁状況は極めて深刻になりつつある。私は自身の精神構造論を客観的に検討し直すべく、マレイ・スタインの「ユング心の地図」やソシュールの「一般言語学講義」などを読み解こうと試みたのだが、訥読（訥弁的、それは完全意識的と似通ったところがあるが、そのような読み）の深刻な妨害によって困難たらしめられた。妨害といえば、私の属する高校がまさにそのような大砲である。学生としての生活は、今の所悪くないが、いやがうえに余所見不可能になってきたと、いえるだろう。機械的計算や、形式学習に終始する学生としての学習は、理論的に考えれば唾棄すべきで忌まわしい排泄物だと言える。しかし私の高校には形式学習から超然した取り組みも見られるし、それほどまでに嫌悪感を抱く対象としても不十分なほど本質的な議論も、少なくないほど稀ではない。閑話休題。本書は、まず初めに前著の補正をしてゆきながら、またその際に不徹底箇所を明るみに出し、それを再検討する。特に情緒論や幾何学構造と巨大レゾン論については、商業的なぞんざいさを想定して批判的に見てみるべきだ。本書の最大の主題は“言葉”である。言葉の恣意性は存在するか、あるのならば音に意味を従属させる形成過程は如何なるものか。言葉というマティエールを刺激されて、抽象マティエールやアイデを顕揚する過程にはどのような条理の向きがみられるだろうか。同族換言における語彙宝鑑の重要性と顕揚。あるいは、“条理”についても述べてゆきたい。自然対立顕揚（後述）と比較についての相関とパラドクスの関係や条理の追憶や“理解”との関係である。また、本書の題たる“状態性“の分析についても御覧に入れたい、自信はないが。ロゴスとマニケーの融合を考慮するのが自然であると思っても、それでは睡眠やそれこそまどろみ、夢について帰納できないのだから。訥弁論の精神遷移論についても寄与しうるだろう。しかしこれ（訥弁論）は偉業と言えるのではなかったか、全く新種の概念によって、従来の統計的な訥弁の分類にひとつの定規を差し挟んだことである！

（架空の謝辞である）さて、本書の執筆に際して激励してくれた私の古くからの友人に深甚なる敬意を表する。彼は私の文章の文法的な誤
りを指摘してくれ、様々の画期的アイデアを教えてくれた。彼の鋭敏な洞察なしに、本書はあり得なかったであろう。また、もっとも本書の理解に努めていただいた高等学校の恩師にも深甚なる敬意を表したい。恩師は、私の実力を認めてくださり、私の著作に何か凄いものがあると直

観された。そして最後に、本書を造り上げるにあたって最高の間接的援助をしてくれた最愛の恋人に私の心的愛のすべてをここに捧げるとともに、最大の感謝を述べたい。彼女の応援、温かさ、そのすべてがなければ、私は精神への洞察を動かすということの重要性に気づくこともなかったであろう。

S2 主題群

C2 精神構造論の建設

前著「精神構造論の概論、痕跡と前表象」の修正及び補足、加えて現状の考えを織り交ぜる。

S1 自然と人為の猜疑

私は幾ばくかの断層で、かいがいしく物事を見抜く鋭さはこれを持ち合わせていないらしかったが、まさに自然的か人為的かということには鋭敏な違和感を構えていた。もしかすれば、議論のはじめに当たってはテーゼの如何なる特質より先んじて、これらとの関係を求めるべきかもしれなかった。簡略なところでは、“文明社会生活での処世術に携わるような諸々の素養を身に付けさせる”という非自明な教訓から、あるいは“後天的とされる規範文法が叩きつける非合理”から、それは見出された。こういう様々に見出された違和感がそれぞれ相異なっていたならば、抵抗することのできない不可避的な絶望が裸形で眼前に張り合うような光景は見当違いであったろうに。ポストモダニズム系などの分類を拒む、例の感覚と似通ったところがあるにちがいない。そうして、自然と人為というしかつめらしきメタファーから、私はひとつの誤謬を教わる。そして当然のようだが、まだまだ若気の道楽という域に安住している気がしてくる。

マニケーの発見というのは、不羈な人為の定義と雄弁家のラディカルな言明から多くを負っている。たしかに、意義は言葉以上に透明化し、声なき声がかすれた喉ごしを媒介して伝達されるようだ。後の議論だが、定義が熟成し抽象化（ここに有耶無耶という意義が割り込んでくるのは極めて興味深く、また重要な見地である）されてゆく間に遺伝的アルゴリズムが至った我々という現在が発見させる既知言語が深層において構築されたようだ。あるいは論理体系の感覚性を抉り出した。こうしたところで、あらゆる心的活動や厳密な学問的営みさえも、ひとつの巨大な感覚という神々しき体系に還元するという“狂気主義”を唱えるに至ったわけだ。共時的体系と史的体系との比較が等比のごとき感を呈しても、言語に起源があったこと、あるいは日常でのランガージュ（言語活動）が常にそれと象徴的に同等なクリエイティビティを発揮していることをもって、イマジネールと言語の同時性に反駁することはできる。簡略化すれば、事物の“言葉”を“知っている”からこそ事物を存在させ、あるいはそれを観察でき、視認できるらしい。しかし忘れてはならないのは、最も自明な出発点としての事柄が、あるエクセンプラム（パター ン的）の指揮からは、軽視することのできない最も非自明な到達点である場合が稀ではないということである。実際、マニケーを想定すれば、あるいは事物の言語による認識を排せば、言語の起源、条理体系などの馥郁なる楽園に連れ出される。

S2 情緒論の誤謬

私たちは前著において、情緒を「有限的多数アイデの複合的顕揚」として公理化した。本書ではこれを前提とはしない。しかし、この仮定から必然性をもって立ち現れる幾つかの表象は、きわめてエレガントで私はこれを歓迎したが、この“情緒論”は実に私の理論的発展の初期に形成された古い観念であるから、なるほどぞんざいな扱いを受けて然るべきであったとここに白状することは当然の礼儀であるように想われる。

ではこの状態を認められたものとして放置すれば、一体どうなったのか。私はまずこのことを思い付いた、狂気構造にはマニケーが散らばっているが、常に一定の上下をこそ捉えてスライドしているので、あるいはこのような様式から、実は「マニケー複合の方向」によって情緒の種々の事情が決定づけられているのではあるまいかということだ。破壊や涙といったマティエールへと我々を誘う情緒は、“情緒の削除”としての猜疑への解答系列がメシアから見て動径的な向きにやってくる複合体である。あるいは、快的な情緒は一般にひどくたちまちと熱してゆくだろう、だからよりむしろ、メシア的平行の複合といってよいだろう？笑いを誘うおかしみというのは、ポーの小説に出てくる偶奇ゲーム王者の少年が言うように、笑顔という形式が代理している。このことを、マティエールと複合体アイデの同値性というサジェスチョンから導くことができよう。すなわち、これは初期仮定への帰着に過ぎない。ということで、快的、不快的情緒をベクトル化してみると、美の模様がみいだされるはずだ。即ち半径は除き、美は凡そ螺旋幾何に服役するのだ。これを“状態性のまどろみ”において後述される“優越思想”に基づいて解釈するなれば、不快な美、即ち自己と他者の優越関係のうちにありありと見出される憧憬の壁面と快的な美、即ち自己と他者の関係が何者かによって断絶されている、もはやそうする必要もないように風馬牛なところは、螺旋幾何の半径に帰ってゆく。

それからこの場合の情緒論は、ベクトルの向きに従ったマニケーの排列を許容する。これは私の精神構造論が到達しえない心的“表”の領分を告げ知らせるのだから、極めて助力となろう。いわゆる、“すべてのマニケーは折に触れては随時メシアから湧き上がってくるのか問題”にも多分の寄与を投じる。しかしながら、難点さえも疑惑されるのは至当だ。つまるところ、精神構造図式は円で事足りたわけだが、円は対称であって、中心からの絶対的な位置づけとやらを許さない。とすれば、向きや螺旋といったものは、どのようにして一義にすればよいのか？確かに、怒り曲線を無条件に選び取り、その際から相対主義を講じるというのもひとつの賢明な判断であろうが、もっともこの方法では精神構造論の他方の側面に影響を与えかねない。こうして情緒論のみで到達できる限界点に達するわけだ。このような臨界点から少し脱して、他の説明可能な領分に舞い戻ることにすると、身体的運動を情緒論から裏付けられることに気づく。身体情緒運動原理は、いまのところは内奥の他者化として認められ得る、偶発行為的な発作的動作に依拠している。即ち、巨大なアイデ的猜疑を説明するマティエールであった。これは、情緒が本質的に心にとって悪徳であって、消去させずにはいられないということを示唆していた。だから、運動に対応した情緒を生み出すために、ひとつの運動となって表現されるのだ。

情緒の根底に優越を想定すること。あるいは、極めて手前勝手に優越から情緒を語ること。私たちは喜怒哀楽の系列を“情緒”として形式化したが、これが最も善き具象例なのかはわからない。さればとて、情緒が何たるものか決定づけたとしても、それが何を意味するかは常にわからないし、“決定づける“という行為と同時にそうして隠れてしまう。だから私たちの学問的動作は、学者たちの死の動作であるといってもよい（メシア、巨大レゾン）。しかし、私たちに有用な部分、あるいは最も法悦な助力をもって、情緒の優越性をそこに見出すほかはないだろう。優越思想は倫理学なのであり、これらの理念に沿っている。このように考えた結果として、優越思想は情緒と、ないしは精神構造論と関係を取り結んできた。

S3

C3 状態性のまどろみ

まったく記述的見地からこれを構成したい。なぜなれば、あなた方が私と同一の生涯を運んだなら無造作に無条件に私のいうところは理解されるだろうし、これこそ後述されるだろうが、完全動作マニュアルの作成に関する“ルビ”を振らしめるから。

S1 優越の詩
これはこれで全く一冊の書物になる題目だが、「状態性のまどろみ」を構築するにあたり必要になるところをざっくばらんに述べよう。 S2 知性論
知性の名の下に標榜されるものを、軽々しく拾えるわけではない。
S3 幼児言語と既知言語
C4 訥弁論の修正
訥弁は精神構造論の基礎理論であって、私の理論的発展のもっとも自明な出発点として採用された。ここでは訥弁の症状（吃音）の狂気構造への還元を試してみよう。また厳密かつ公理的な案は、拙著「訥弁についての原理的背景と臨床的な諸事情」を読まれたい。
S1 累次特質の精神構造論的解釈
累次は精神構造論的に判断可能である。状態性のまどろみでしたためられた知性論において、訥弁がその内で劣った位置づけを受けていることは自明であるが、しかしこれはほとんど訥読の場合にのみ見出されるはずである。

C5 外伝としての変遷公理論